

Christopher M. Davidson. 2005. *The United Arab Emirates: A Study in Survival*. Boulder and London: Lynne Rienner. xi+333pp.

本書は、アラブ首長国連邦 (UAE) の政治経済構造について、首長家を中心に据える政治体制と政治的レジティマシーの形成過程を通して分析した一冊である。現代の UAE は、近代的発展によって築かれた政治経済構造と、それらを取り巻くグローバル化の影響により、さまざまな問題に直面している。本書は、いかに首長 (君主) 制がそのような状況に対処しようとしているのかを明らかにするものである。著者のクリストファー・デイビッドソン (Christopher M. Davidson) は、本書出版時に UAE のザイド大学助教授 (政治学) であり、現在は英国ダーラム大学中東イスラーム研究所に所属している。本書は、英国セントアンドリューズ大学に提出した博士論文をもとにしている。

近年、ドバイの大規模な開発プロジェクトを筆頭に、UAE に対する世界中の関心は高まっている。同国は、ここ 10 年の間に 9.11 事件や政治指導者の交代、そして石油価格の高騰を経験するなど、大きな環境の変化を遂げている。しかしながら、そのような状況とは裏腹に、石油や経済の領域を除いては、現代 UAE を対象とする研究分析は決して多くない。UAE 研究の基本文献である [Heard-Bey 2004 (1982)] でさえ、初版は 80 年代前半であり、しかも UAE の国家形成史を中心に扱っている。その他の主要な先行研究 [Abudullah 1978; Zahlan 1978; Peck 1986; Taryam 1987; Kazim 2000] を見ても、やはり近現代史の記述や UAE の概説の域を出ない。一方、UAE を分裂した構成要素からなる国家として捉え、その統合の観点から研究したものに [Khalifa 1979] がある。しかし、出版からすでに 30 年近くも経っており、当時の分析枠組では現状を捉えきれない部分もある。一方、日本における研究蓄積は少ないながらも、[大野 1995; 濱田 2005] などは伝統的な部族制と現代の政治体制との関係に着目し、UAE の政治・社会構造の一端を明らかにした。

しかしながら、これまでの UAE 研究全体に言えることは、他の中東諸国 (エジプトやイラン、隣国サウディアラビア) と比較して、政治分析や社会分析の蓄積が少ないということである。たとえば、石油に依存するレンティア (不労所得) 国家や君主制国家という認識はされていても、その実態については必ずしも実証的に明らかにされているとは言えない。本書は、こういった研究上の空白を埋める作業に挑戦した意欲的な試みであり、それ自体に大きな意義を見出すことができる。

さて、本書の目的は 2 点ある。第 1 に、UAE の政治体制としての君主制が、単に時代錯誤のものではなく、近代化と共に内部変化を遂げていることを実証的に示すことにある。第 2 に、UAE の抱える国内問題や将来的な不安要因を、政治経済構造との関係で理解することである。以上の目的のもとに、UAE の現状を丁寧に読み解こうとする姿勢が本書の随所に垣間みられる。

それでは、具体的な内容についてみていきたい。本書は、序章と終章を含め、全 7 章の構成をとっている。序章では、著者の問題意識と分析枠組を提示した後、各章を概観する。問題意識については前述したとおりであり、分析枠組としては従属論と近代化論の二つを提示し、修正を加える。

次に、第 1 章「歴史的背景」では、本書の議論の前提として UAE の歴史的展開と、その背景にある伝統的な政治・経済・社会の構造を概説する。そこでは、UAE が独立に至るまでに世界経済の中で「周縁化」され、その後レンティア国家としての構造が現れる過程が描かれた。内容自体は先行研究を手際よくまとめた感があり、筆者の本領は次章以降で発揮されている。

さて、これまで UAE を含む湾岸アラブ諸国を、石油収入に依存したレント国家として指摘する研究は、枚挙に暇がない。しかしながら、その内部における分配と政治的レジティマシー形成システムを具体的に分析した研究はあまりなく、UAE に関しても同様である。第2章「君主制の存続——概観」では、UAE の政治構造を「シャイフのジレンマ」を手がかりに検討する。君主制の存続にとって、近代化のプロセスにより発生する諸勢力と伝統的政体をいかに融和させていくかが、重要な課題となる。UAE の場合、単なるレントのばら撒きだけではなく、「新世襲国家」としてのネットワークや文化・宗教・アイデンティティ、外部勢力からの支持を動員することにより、政治的レジティマシーを構築していったのである。そして、政治的安定にとってもっとも重要なものは、首長家内部での権力分配と意見の集約であったと指摘する。

続く第3章「社会経済の発展と多様化への取り組み」では、多様化する UAE 経済を検討し、とくにアブダビ首長国とドバイ首長国の開発戦略と競争を比較する中で、両者の差異と連邦全体の経済状況を観測する。UAE は、産業の近代化やフリーゾーン政策、そしてドバイを一躍有名にした観光産業とインフラ開発により、着実に経済の多様化を推し進めている。その一方で、社会も急激な変化と成長を遂げ、労働や環境、市民権やアイデンティティに至るまで、社会問題も多様化している。また、これまであまり注目されなかった首長国間の経済格差も、将来の大きな不安要因となりうると指摘する。政治と経済の関係の理解としては、従来の見方からの大きな変更はなく、次章の議論への橋渡しとなっている。

そして、本書のもうひとつの見所は第4章「国内病理と政治過程」である。UAE の発展の影に隠れ、構造化された問題を掘り起こしている。UAE の政治体制におけるポスト分配は、政策決定機関から商工会議所に至るまで首長家内部の世襲によって決定される。さらに、経済が近代化し発展するなかで、ポスト自体や UAE ナショナルの特権（不動産取得、ビザのスポンサー制度、株式の保有比率の優位）が、油田に代わる新しいレントの源泉となっているのである。そこに、新しい利益団体も生まれ、今日の UAE 経済を動かしていることを明らかにした。

これまでの議論を踏まえ、第5章「グローバル化と市民社会への見通し」ではグローバル化が UAE に与える影響を検証していく。著者は、グローバル化を UAE の発展と将来の構造を規定すると評価する一方で、これまでに指摘されてきた国内問題を存続させるものとしても捉えている。さらに、社会に自由化への動きを生んでいるとも主張する。たとえば、いくつもの NGO などの活動例を紹介し、「市民社会」の萌芽としている。しかし、事実上政府の管理下にある市民団体をみて、そもそも市民社会と呼べるかどうかは、甚だ疑問が残る点である。終章では、以上の議論を総括して結論に代える。

本書は、アラビア語を含む豊富な文献のほかに、インタビューなどフィールドワークで得た情報を盛り込み、リアリティのある内容にまとめ上げている。チャートを用いて論点を整理しているのも、読者にとって非常にわかりやすい。今後、Heard-Bey の著作と並び UAE 研究の代表的な文献としてあり続けるだろう。

以上の評価を踏まえながら、評者の疑問を3点述べたい。第1に、政府や統治に対する UAE ナショナルの姿勢が明らかにされなかったことである。本書では、UAE ナショナルをパトロン＝クライアント関係における「クライアント」として、所与のものであるかのように捉えるため、その様子は極めて静態的に描かれていた。しかし、彼らは単に上からの恩寵を賜るだけの存在なのだろうか。UAE の第1の構成要素である UAE ナショナルの内部については、本書の議論からはその様子を窺い知ることができない。被統治者の中でも少数の特権的な立場にある UAE ナショナルをどの

ように捉えるかは、今後の UAE 研究によって明らかにされるべき課題である。

第2に、UAE人口の大部分を占める外国人労働者の存在についても、政治経済分析の変数に組み込まれていないことである。たしかに、現時点において外国人は政治構造には直接の影響を与えない。しかし、実際の社会運営における存在感は大きく、それを考慮しないわけにはいかない。実際、昨年はドバイで大規模な外国人労働者の暴動が起これ、政府は本格的な対応が迫られたのである。この点を抜きに、UAEを語りえない。

第3に、歴史的な実証としては先行研究を超え、とくに政治の内部構造については細部までよく検討されている。しかしながら、理論的な分析としては説明に欠けている。著者は、従来の近代化論や従属論の問題を指摘した上で、「近代化修正論」と「レンティア従属論」という新たな理論的枠組を提示している。ところが、それ自体をあまり明確な定義を示さずに用いているため、筆者の理論的な主張が見えてこない。

また、惜しむらくは、参考文献のアラビア語文献について、その転写がないことである。今後の UAE、ひいては湾岸アラブ諸国研究に携わる人間の便宜を考えるなら、当然必要な配慮である。

本書を読了後、評者が改めて思ったことは、日本における UAE および湾岸アラブ諸国研究の蓄積不足と偏り、理論的説明の不在である。その理由を UAE に限って言えば、これまでの政治経済的な安定が、研究需要そのものを生み出さなかったからである。しかし、エネルギー安全保障はもちろん、市場としての潜在性や地域情勢の観点からも、UAEの重要性を強調しすぎることはない。今後、できるだけ早期に日本からの視点を盛り込んだ研究分析を進める必要があるだろう。

参考文献

- 大野元祐 1995 「商家と首長家——アブ・ダビとドバイにおける部族的社会とその変遷——」『日本中東学会年報』10, pp. 157-177.
- 濱田秀明 2005 「アラブ首長国連邦——近代国家建設と部族社会——」日本国際問題研究所編『湾岸アラブと民主主義』日本評論社, pp. 159-183.
- Abudullah, M. M. 1978. *The United Arab Emirates: A Modern History*. London: Croom Helm; New York: Barnes & Nobel books
- Heard-Bey, F. 2004 (1982). *From Trucial States to United Arab Emirates*. Motivate Edition. Dubai: Motivate Publishing.
- Kazim, A. 2000. *The United Arab Emirates A.D. 600 to the Present: A Socio-Discursive Transformation in the Arabian Gulf*. Dubai: Gulf Book Centre.
- Khalifa, A. M. 1979. *The United Arab Emirates: Unity in Fragmentation*. Boulder: Westview Press.
- Peck, M. C. 1986. *The United Arab Emirates: A Venture in Unity*. Boulder: Westview Press.
- Taryam, A. O. 1987. *The Establishment of the United Arab Emirates 1950-85*. London, New York & Sydney: Croom Helm.
- Zahlan, R. S. 1978. *The Origins of the United Arab Emirates: A Political and Social History of the Trucial States*. London: The Macmillan Press.

(堀抜 功二 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)